京都の新しい公立大学

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

地域経営学部　地域経営学科／医療福祉経営学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL.0773-24-7100　FAX.0773-24-7170
http://www.fukuchiyama.ac.jp

地域協働型実践教育 2017年度 成果報告書

福知山公立大学

福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

地域協働型実践教育
2017年度 成果報告書

受け入れ先地域	京都府／兵庫県／福井県／大阪府

1. 福知山市中心市街地（商店街）の活性化
2. 地方地域の現状や課題を福知山市三和町の実態を通して理解する
3. 福知山市夜久野町をフィールドとした地域課題の基礎的調査と分析
4. 大江町の成り立ちと発展プロセスを分析する
5. フィールドワーク教育をベースとした地域協働型実践教育～ゆらのガーデンをフィールドに～
6. 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ－地域協働型実践教育の試み－
7. 生きのいい商店の成功要因分析
8. 福知山市三和町の自然・社会・文化の実態と農業・農村の現状と課題
9. 自治体経営と地方公会計
10. 福知山市大江町の観光関連施設の活用と観光地域づくりの提案
11. 学生の最も身近な組織である「大学」を理解する
12. 「ふるさと納税」制度に関する－考察　－財政ならびに地域経済との関係に着目して－
13. プロジェクト学習を通じた地域協働型実践教育～東舞鶴をフィールドとして～
14. 観光地経営の観点から海の京都観光圏を考える
15. 新たな学習指導要領の趣旨を踏まえた地域学習のあり方についての検討
16. 財務諸表の“作成”と、財務諸表が“利用者に与える影響”
17. 福知山移住促進媒体2種と「個別テーマＡｔｏＺ」の制作
18. 運動習慣と健康増進活動－ヘルスツーリズムを題材として－
19. 1年次に取り組んだ、レポートのまとめ方の修得を継続する。加えて、病院の生データの分析を試行する。
20. 北近畿地域における医療・介護資源の現状は…不足？偏在？それとも充足？
21. 伝統文化の観光資源としての活用
22. 中国語圏観光客のための観光案内マップづくり
23. 福知山市大江町の情報発信
24. 理論と臨床政策を往還するCommunity Based Learning～与謝野町をフィールドとして～
25. 学外教育資源の地域間格差に関する調査―京都府における大学生ボランティアの活用状況に着目して―
26. 経営理論の実務への応用に関する演習
27. 「福知山マラソンＡｔｏＺ」と「個別ＡｔｏＺ」の制作

与謝野町　理論と臨床政策を往還する Community Based Learning ～与謝野町をフィールドとして～

伊根町　新たな学習指導要領の趣旨を踏まえた地域学習のあり方についての検討

舞鶴市　プロジェクト学習を通じた地域協働型実践教育 ～東舞鶴をフィールドとして～

福知山市　福知山市夜久野町をフィールドとした地域課題の基礎的調査と分析

福知山市　北近畿地域における医療・介護資源の現状は…不足？偏在？それとも充足？

福知山市　フィールドワーク教育をベースとした地域協働型実践教育 ～ゆらのガーデンをフィールドに～

福知山市　大江町の成り立ちと発展プロセスを分析する

福知山市　福知山市大江町の観光関連施設の活用と観光地域づくりの提案

福知山市　福知山市中心市街地（商店街）の活性化

福知山市　地方地域の現状や課題を福知山市三和町の実態を通して理解する

福知山市中心市街地（商店街）の活性化

地元の小学生との和紙灯篭制作

科目名 地域経営演習Ⅰ・ⅡーA（1回生）

担当者名 平野 真、中尾 誠二

本演習の目的

福知山市中心市街地（商店街）の活性化を目的として、商店街の歴史や現状、過去の分析例などについて文献を通して学ぶ。また実際に商店街の商店主たちへのヒヤリングも行い、どのようにしたら商店街を活性化できるか、学生なりに考える。そのヒントとして、伝統和紙を用いた灯篭を地元の小・中学生と共に制作し、竹林に飾るイベントを実施することで、どのような影響が起こるか、実践を通して学ぶ。

本演習の概要

１）和紙灯篭プロジェクトへの参画：まだ高校を出たての１回生に対しては、まず地域の人々（市民の環境保護団体、地元の小・中学生など）との灯篭作りやイベント開催といった協働活動を通じて、行動することの意味や人との交流の面白さを体感してもらった。これと合わせて、徐々に、商店街の問題に関して文献やヒヤリング調査を通じて学習し、地域問題への理解を深めた。

竹林でのイベント
「第２回竹林と光のプロムナード祭」

２）基本学習とフィールド調査：商店街の疲弊するメカニズム、福知山市の商店街の歴史、実際の商店主の経営思想、他の北近畿と比べての福知山市の観光産業の位置づけ、福知山市の伝統文化や伝統工芸の扱われ方など様々な角度から関係する知識を学習し積み重ねていった。そのうえで、実際に商店街の商店主へのヒヤリングや、活気のある９号線沿線の商店の経営分析なども、グループに分かれて行い、自分たちなりに、今後どのようにして商店街を活性化できるか考えていった。またこの研究発表を同様の商店街疲弊問題で悩む宮津市で行い、市民と交流した。

宮津市での市民との交流会

３）省察：学習を深める中で、上記和紙灯篭のプロジェクトも振り返り、それがどのような効果をもたらしたのか、どのような意味があるか反芻してみた。自分たちの作った灯篭がその後多くの地域の祭りで飾られたこと、活動に参加した中学生たちや市民から寄せられた感想文なども読み、こうした活動が観光資源の開発や間接的な商店街の活性化にどういう効果を持つのか持たないのか、学生各人でそれなりの意味付けと感想をまとめた。

４）教員側からの振り返り：大学初年度の教育としての展開という点に苦慮したが、学生たちが自発的に地域課題の解決策を考え出したのには教員として感動を覚えた。教員自身も、学生との行動を通じて、現場の様々な問題に気づかされ、教育的研究的な示唆を得ることができた。

報告会用資料

福知山市中心市街地（商店街）の活性化

グループ①（商店街調査チーム）報告内容

メンバー：石橋優志、酒生阿弥華、竹内就人、日高みのり（アイウエオ順）

I. 福知山市の商店街の実態調査

福知山市の商店街は、図1に示すように、平成10年以降休日の通行量が平日並みに下がり、衰退の一途である。この原因について、福知山市役所産業振興課・西村正芳氏にヒヤリングを行い、以下の3つの要因が考えられることがわかった。
（1）大規模小売店の出店
➡イオン、さとうグループへの消費者流出
（2）国道9号線沿いにある商業施設の台頭
➡スターバックスの進出によりさらに勢いづく
（3）交通者の整備とマイカー所有率の向上
➡郊外の大店舗でまとめて買い物をするように

図1. 福知山市内の商店街の実態
出典:福知山市役所 農林商工部振興課課長補佐 西村正芳氏提供資料「福知山市の商工業」

福知山市役所では、公共投資を行い、中心市街地活性化の推進に取り組んでいきたい、と考えているそうである。

一方、商店街の現存する2店の商店主および店長にヒヤリングを行ったところ、現代のニーズに応えつつ、まずは商店街の賑やかさを取り戻したい、必ずしも利益をあげなくとも文化的な場所としていきたい、などの意見が寄せられた。

II. まとめ：商店街の課題と対策

福知山市役所では、中心市街地の商業的な活性化を志向している。

一方、商店街の商店主たちは、まだ一部の調査範囲内でのことだが、商業的な繁栄よりも、市民の文化的な交流の場とすることを望んでいた。

行政と市民の間には微妙な意識のズレや温度差が感じられた。

今後、町まどキャンパスでの活動などを通じて、学生がその温度差を小さくする動きかけをしていきたい。

グループ②（商店経営調査チーム）報告内容

メンバー：文藤芦香、池田つかさ、岡野みゆき、岡本怜大、大沢拓真、早川昴樹、三樹颯斗、鈴木優心

I. 福知山市の商店の経営調査

福知山市の商店のうち、
（1）旧商店街にあるモジカ（古本と珈琲）
（2）市内に点在する繁盛ラーメン店
（3）9号線沿いにある大手チェーン店としてのスターバックス（珈琲）とユニクロ（衣服）
などを取材し、それぞれの店の経営方法の違いについてについて調査した。

（1）旧商店街にあるモジカ（古本と珈琲）

経営主体は、シマフィルム株式会社という映画館経営などを手がける会社で、広小路商店街にあった古い映画館の経営再建を手がける一方で、その隣に映画文化に関係の深い文学などを楽しむ場所として、モジカという古本屋を作った。店長の西村氏は文学に造詣が深く、店を本好きの人の交流の場にすることを夢見ている。収益向上が目的ではなく、文化的な目的を持った事業の展開である。

（2）市内に点在する繁盛ラーメン店

ラーメン店は基本的に収益重視の経営を行っている。店の経営で苦労された元店長から、どのように利益を上げるか、様々な工夫について話を聞くことができた。ラーメン店の立地は、収益獲得を目的として損益分岐の観点から様々に判断される。細かい工夫としては、店の外に行列を作って宣伝に役立てる、手書きのメニューやはだか電球で温かみを演出するなど多数あった。いくつかの経営の違うラーメン店を調査し、それぞれに異なる工夫で差異化を図っていることもわかった。

図1. 福知山市内の個性あふれるラーメン

（3）9号線沿いにある大手チェーン店としてのスターバックス（珈琲）とユニクロ（衣服）

スターバックスは北米に本社のある大手珈琲店のチェーン店であるが、従業員を大切にし、マニュアルに沿った行動ではなく、店員一人一人が珈琲文化と接客を楽しめる環境作りをしがいがでている。毎日400人以上の顧客が詰めかけ、アルバイトを含めると30人近い従業員が対応している繁盛店である。隣接しているリタヤでは新本を売っているが、互いの相乗効果を狙っている。

一方、ユニクロは日本で生まれた有名な低価格衣料の普及を目指したチェーン店であるが、店に出入りする顧客数や推定客単価などから売上予測を行い、同社HPでの利益率などを勘案すると、建物確保に大きな投資を行い大きな売上をあげているビジネスモデルが推定できた。

どちらの店も、収益を確保するしっかりとした経営路線に基づき、事業理念をもちながら展開を図っている。

II. まとめ：商店経営思想の立地依存性

興味深いことに、土地代やテナント代が高い交通量の多い場所では、それなりに収益性を追求した商店が多く、逆に交通量の少ない場所では、あまり収益を気にしなくても店なりの理念に基づいて経営している商店が多いように感じた。商店街のあり方を考える上で、ひとつのヒントになるように思った。

グループ③（文化資源調査チーム）報告内容

メンバー：鈴木杏梨、西澤七海、吉朝優貴（アイウエオ順）

I. 福知山市の伝統文化・伝統工芸の現状調査

地域の伝統文化や伝統工芸は、地域を支えるものとして重要であり、観光に結びつけて観光客の呼び込みやリターンターンでの移住者を増やすために役立つと考えられる。

しかし、実際には、様々な文献やインターネットで調査した結果、その地域の伝統文化や伝統工芸も衰退を強いられている場合が多いようである。

図1に福知山どっこいせ祭りの参加者数を示すが、どっこいせ踊りを中心としたこの祭りも、参加者の激減にも見れるように、その維持・存続は厳しいものがある。

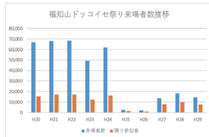


図1. 福知山踊りの現状
（「福知山市まちづくり観光課」資料）

福知山の典型的な伝統文化であるどっこいせ踊りについて、振興に尽力されている田村卓巳氏のお話を伺った。

福知山踊りについては、後継者を増やすこと、認知度を上げること、参加者を増やすこと、若者に受け入れられるようにすることなどが課題であるという。

福知山の伝統工芸である和紙などについても、和紙職人の田中敏弘氏のお話を聞接的に伺い、後継者を増やすこと、販売方法の開拓、日用品の開発、認知度を上げるなどが課題として浮かび上がった。

II. まとめ：伝統文化・伝統工芸の課題と対策

基本的には、後継者を増やすことと、認知度を上げることが重要である。そのため、
（1）現代に合わせた形に変えていく➡興味をもってもらう
（2）SNSで発信➡情報を広める
（3）和紙カフェをつくる➡気軽に触れられる
などの対策があるのではないかと考えた。

グループ④（観光産業調査チーム）報告内容

メンバー：石山烈大、髙原望乃、田口智也、長谷川貴大、藤原尚輝、三村義貴、目黒裕康、山本隆志（アイウエオ順）

I. 北近畿の観光産業調査

昨年度4回生の割甲家氏の卒論を参考に、北近畿各地の観光産業の実態調査を、各種文献、インターネットを活用して調査した。その中で、これからの観光振興に何が重要であるか、という方向に自主的に議論が進んでいった。ここでは、観光振興への提言を中心に記述する。

II. 観光振興への提言

図1. 朝来市での銀山ボーイズの宣伝から

もっとも重要なことは、従来の観光資源と現代とを融合させることである。
朝来市の銀山ボーイズがその好例であり、生野銀山という古い観光資源を、地下アイドル的な文化と結びつけたことで、大ヒットにつながった、と分析する。

この考え方で具体的な提案をすると、伝統工芸である和紙を使った和紙カフェなどは良い企画であると考える。和紙をインテリアに使うことで、和紙の持つ温かみと癒しの場であるカフェを組み合わせることができる。同時に、この企画を通して、人々に和紙を身近なものと思ってもらうことができるのが利点である。福知山の丹波和紙を使って町かどギャンパスなどで実現してみたい。

図2. 和紙カフェ

ほかにも、福知山のスイーツ文化を活用して、福知山淑徳高校、マウンテン、足立音衛門などに協力要請して、地元特産の農作物を使って新たな特産物開発なども行ったらどうか。

図3. 地元特産農産物

学生の感想

地域経営演習は今まで学んできた学習方法とは違ったアプローチによる講義だったので学ぶことが多くありました。実践的な活動はする機会がなかったので自分にとって非常によい経験になりました。（中略）小学生や中学生、園児たちと一緒に灯篭を作り、イベントでそれらを利用しました。おそらく、自分たちだけでこの活動を行っていたら、地域からは他人事として受け取られ、自分たちの満足だけで終わってしまうと思います。活動内容としても今ほどの濃い内容にはなっていないと思います。そこの地域に住む人々とともに活動を行うことで、自分たちだけでは気づくことのできなかった要点にも気づくことができ、そこから新たな地域との繋がりが生まれてくると思います。（中略）この活動を通して、地域との繋がりが大切だと思いました。

地域経営学科　1回生　岡本 怜大
三木高等学校（兵庫県）出身

前期、後期を通して最も大切だと思ったことは、につながるということだ。灯篭を使ったプロジェめたり、イベントで飾るためにスタッフと連携を企画を貰ったり、二回目三回目と誘ってもらえたることで、人との繋がりも増え、自分の将来に役の地域経営演習で感じることができた。今後将来像にちかづけるために、自分を活かしてく手助けできることなら、その助けを求める人のくしたい。

“繋がり”のあるコミュニティが自分自身の成長クトを行うにしろ、作ってもらう子どもたちを集取らねばならない。しかし、それを通して新しいりということもありうると思った。何かを実行す立つ経験への繋がりも得ることができると、こは、自分が将来やりたいことにできるだけ近いれる人との繋がりを大事にしつつ、逆に自分がために精一杯の手助けができるように誠意を尽

地域経営学科　1回生　酒生 阿弥華
北陸高等学校（福井県）出身

私が一年間の地域経営演習を通じて一番大切だと思ったことは、ないと諦めるのではなく、なければ作ればよいということだ。観光客があまり来ない地域で、この地域には何がありますかという質問をすると、何もないという返事が返ってくるという平野先生のお話があった。何もないと諦めてしまったら、本当に何も始まらない。しかし本当に何もないのかと考えたら、何もない地域はない。ないのは、地域にある資源から新しいものを作ろうとする発想がないだけだと学んだ。（中略）今年一年は平野先生に準備してもらったものに取り組むものであった。そのため、特に考えることもなく動作をするだけであった。しかし、自分たちで考えたことやろうとすることすべてを自分たちでやらなければいけない。そのため、今年一年と比べ物にならないほどのことをしなければならない。（中略）やってみて分かったことを話し合うことが、今年の学習を発展させることに繋がると考える。

地域経営学科　1回生　田口 智也
加茂高等学校（岐阜県）出身

地方地域の現状や課題を福知山市三和町の実態を通して理解する

科目名 地域経営演習Ⅰ・ⅡⅠB（1回生）

担当者名 矢口 芳生、加藤 好雄

本演習の目的

福知山市三和町へ現地訪問を行うことで地方地域の現地の現状と課題を抽出し、三和町を対象に3つの産業から地域の活性化の方向性を探る。また、その過程を通して「地域協働型実践教育」とは何かついて学ぶ。

本演習の概要

前学期では、現地の現状と課題を探るために福知山市三和町を訪問した。はじめに梅原・千束の戦後開拓の歴史と現在、川合地区の古城、大原神社・産屋、菟原の細野峠・友渕の古城の意義と現状について理解し、次に三和町の工業団地内の野村佃煮（株）と地元農林業との連携の可能性、公共交通の課題と将来性について理解を深めた。さらに農事組合法人かわい、友渕集落の農業生産組合、新規就農者の方にインタビューを行い三和町の農業の課題を探った。

後学期では、三和町を対象に3つの産業（農業・製造業・観光業）から地域の活性化の方向性を探った。はじめに「農業を核とした地域おこし」の視点から、福知山市・友渕集落の年齢別人口構成の調査や営農組合等のヒアリングから農村と農業の実態を学び、集落の住民とともに実際の農業や地域おこしの可能性について討議を行った。次に「地方地域を支える製造業」の視点から、製造業の集積地である福知山市の「長田野工業団地」や三和町の「長田野工業団地アネックス京都三和」の企業調査や京都府を中心とした工業団地内での業種比較などを通して、今後の製造業による地方地域の活性化の可能性を模索した。さらに「有名観光地でない地域で成功する観光」の視点から、外国人旅行客を主要ターゲットとし、高価格帯で高サービスという明確なマーケティング・コンセプトをもとに成功する古民家の宿「ふるま家」オーナーから、マーケティングや経営の実際を学ぶとともにインバウンドでのサービス・オリエンテーションの難しさを学んだ。

学生の感想

私達のチームは、耕作放棄地の利用・ぶどうを活かした地域活性について考えました。実際に地域を訪問し、農作業の一部を体験したうえで、何度も、地域の方々や学生間で話し合い、何が問題なのか？どうすれば良くなるのか？という事をずっと考えてきました。そこでまとめたものを、地域の方対象にして発表会を行いました。このような取り組みをすることによって、地域の方々の意識が少しでも変化していくのなら、この地域協働型実践教育を柱とした演習の意味があると考えています。

地域経営学科　1回生　西川 和杜
南宇和高等学校（愛媛県）出身

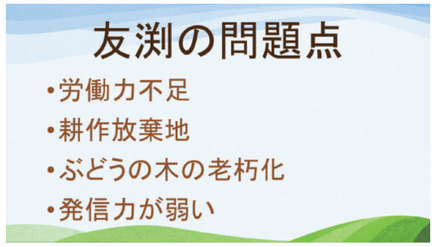
前学期は、フィールドワークの大切さを知りました。講義や配られる資料を読むだけでなく、現地を実際に訪問して、自分の目で見て、その地域の人の話を聞くことで地域の現状と課題を肌で感じ取ることができました。後学期は、前学期の調査をもとに、一つの課題に絞り、そこからどのように地域活性化につなげるかに取り組むことができ、地域課題の解決の取り組み方を学ぶことができました。これらの活動を演習で行い、改めて実地域協働型践教育の重要さを感じました。

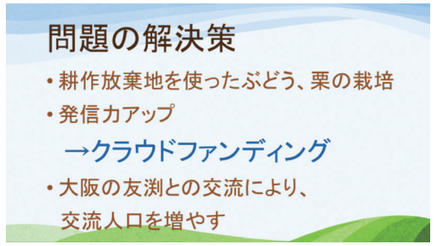
地域経営学科　1回生　夏田 康成
日向高等学校（宮崎県）出身

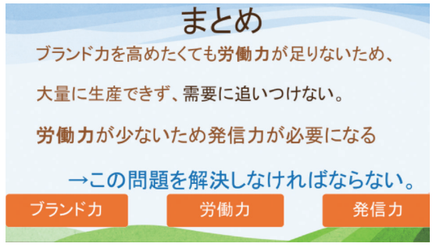
報告会用資料

「三和町が抱える問題を考える」

1.「農業を核とした地域おこし」





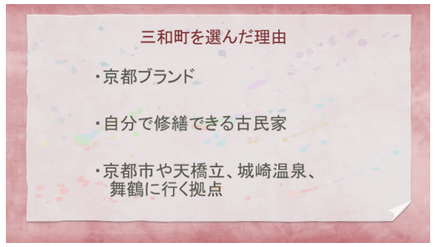


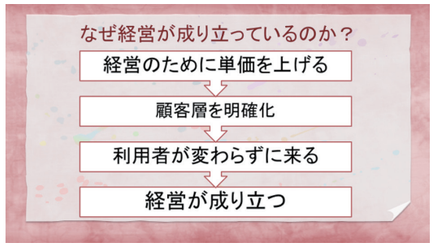
2.「地方地域を支える製造業」

アネックスと長田野工業団地の比較

	長田野工業団地	アネックス三和
企業数	41	10（空き15区画）
アクセス	IC近接	IC10分
周辺施設	多い	少ない

3.「有名観光地でない地域で成功する観光」





※3チームの発表資料の一部を掲載

福知山市夜久野町を フィールドとした地域課題の 基礎的調査と分析

科目名 地域経営演習Ⅰ・ⅡーC（1回生）

担当者名 遠藤 尚秀、江上 直樹

本演習の目的

本演習では、福知山市夜久野町をフィールドとし、夜久野町が直面する課題について調査・分析を行うことで、社会調査の基礎的な手法を修得することを目的としている。特に、二次資料の収集（学術論文の取り寄せ等）や一次資料の収集（インタビュー調査、質問紙調査）を学生に体験させることで、多様な手段で情報を収集することの必要性を認識させることを重視した。

本演習の概要

本演習は、夜久野みらいまちづくり協議会のご協力のもと、福知山市夜久野町をフィールドとして調査・分析を行った。具体的には、同協議会が組織する部会（経済活性化部会、定住交流促進部会、教育文化スポーツ部会、福祉あんしん部会）に合わせクラスを4グループにわけ、それぞれ一次資料および二次資料の収集を行い、各テーマについて考察を深めた。「経済」グループは、夜久野町唯一のスーパーマーケットであるミニフレッシュ夜久野店の課題について、店舗へのインタビュー調査および地域住民への質問紙調査をもとに検討した。「定住交流」グループは、空き家の利活用による若者移住の可能性について、地域住民および本学学生への質問紙調査をもとに考察した。「教育」グループは、学習指導要領の改訂を踏まえた中学校における地域学習の課題について、夜久野学園の教員および生徒へのインタビュー調査と質問紙調査から検討を行った。「福祉」グループは、夜久野町の困りごとアンケートにて最も意見の多かった除雪の問題について、<共助>という観点から市職員および地域住民へのインタビュー調査を踏まえて考察した。また、どのグループにおいても、上記のような一次資料の収集だけでなく、メディアセンターのレファレンスサービスを活用し、先行研究・先行事例としての論文を取り寄せ、二次資料の収集も行った。

学生の感想

この1年間とても充実していたと思います。今まで知らなかった土地を訪れたこと、地域の方と交流できたこと、知らなかった事実を発見したことなど、新鮮なことばかりでした。夜久野みらいまちづくり協議会の方々をはじめ、地域の方々が毎回温かく迎えてくださったことがとてもうれしかったです。訪れるたびにこの地をもっと知りたいと思うようになったことは自分の中でプラスになったと思います。また、フィールドワークが進んでいくにつれ、地域の課題を知り、自分の知識不足や偏りにも気づくことができました。地域課題への対策を考えるときに、知識不足でなかなかいい案が出せず苦労したので、この一年で得た体験を生かし、今後は専門的な知識を増やすということにも力を入れたいです。

地域経営学科 1回生 垂水 友香
脇町高等学校（徳島県）出身

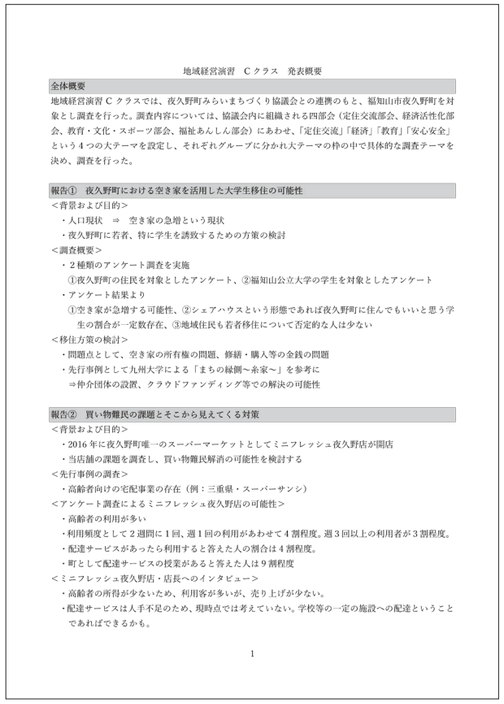
自分たちのクラスは夜久野町に焦点を当て、実際にフィールドワークを通して、夜久野町が抱える課題の発見、その改善を目指す考察を深めた。素直な感想を言うと、夜久野町は驚くほど田舎でスーパー等の店舗が圧倒的に少ない。よく言えば自然が豊かで、都会の煩わしさが嫌な人にとってはいい場所なのかもしれない。夜久野町の人の話によれば、「ないものを取り入れるより今あるものをスペシャルに」とのことだ。自分は最初、発展のためなら景観は多少変わっても構わない考えだったがその考えを聞いた時に衝撃が走った。自分たちで勝手に改善点を考えてそれを一方的に提示してしまっては、結局は自分たちの理想になってしまうことがわかった。町全体でどうしていきたいかを踏まえて考えていくことを前提とする必要さを学んだ。

地域経営学科 1回生 齊藤 文哉
不来方高等学校（岩手県）出身

報告会用資料

福知山市夜久野町をフィールドとした地域課題の基礎的調査と分析

地域経営演習 Cクラス



地域経営演習 C クラス 発表概要

全体概要

地域経営演習 C クラスでは、夜久野町みらいまちづくり協議会との連携のもと、福知山市夜久野町を対象とし調査を行った。調査内容については、協議会内に組織される四部会（定住交流部会、経済活性化部会、教育・文化・スポーツ部会、福祉あんしん部会）にあわせ、「定住交流」「経済」「教育」「安心安全」という4つの大テーマを設定し、それぞれグループに分かれ大テーマの枠の中で具体的な調査テーマを決め、調査を行った。

報告① 夜久野町における空き家を活用した大学生移住の可能性

＜背景および目的＞
・人口現状 ⇒ 空き家の急増という現状
・夜久野町に若者、特に学生を誘致するための方策の検討

＜調査概要＞
・2種類のアンケート調査を実施
①夜久野町の住民を対象としたアンケート、②福知山公立大学の学生を対象としたアンケート
・アンケート結果より
①空き家が急増する可能性、②シェアハウスという形態であれば夜久野町に住んでもいいと思う学生の割合が一定数存在、③地域住民も若者移住について否定的な人は少ない

＜移住方策の検討＞
・問題点として、空き家の所有権の問題、修繕・購入等の金銭の問題
・先行事例として九州大学による「まちの縁側～糸家～」を参考に
⇒仲介団体の設置、クラウドファンディング等での解決の可能性

報告② 買い物難民の課題とそこから見えてくる対策

＜背景および目的＞
・2016年に夜久野町唯一のスーパーマーケットとしてミニフレッシュ夜久野店が開店
・当店舗の課題を調査し、買い物難民解消の可能性を検討する

＜先行事例の調査＞
・高齢者向けの宅配事業の存在（例：三重県・スーパーサンシ）

＜アンケート調査によるミニフレッシュ夜久野店の可能性＞
・高齢者の利用が多い
・利用頻度として2週間に1回、週1回の利用があわせて4割程度。週3回以上の利用者が3割程度。
・配達サービスがあったら利用すると答えた人の割合は4割程度。
・町として配達サービスの授業があると答えた人は9割程度

＜ミニフレッシュ夜久野店・店長へのインタビュー＞
・高齢者の所得が少ないため、利用客が多いが、売り上げが少ない。
・配達サービスは人手不足のため、現時点では考えていない。学校等の一定の施設への配達ということであればできるかも。

1

・気軽に立ち寄れる店、若い人の利用率UPを目指す。

＜考察＞
・配達サービスの需要はあるが、人手の関係で実施は難しい
⇒一定の拠点（学校、駅等）への配達という方策による買い物難民の解消の可能性は考え得る

報告③ 夜久野学園の地域連携教育の課題

＜背景および目的＞
・近年、教育政策の変遷により地域連携教育によって教育を充実させようとする動きが高まっている
・地域連携教育を行う夜久野学園において、その課題と解決策を探る

＜校長先生へのインタビュー調査＞
・地域連携教育の目的である「地域で育つ、ふるさとを愛する心を育む、生徒の様子を学校外に発信すること」は達成している。
・課題としては、①地域連携教育の活動のジャンルを増やすこと、②人集めの情報収集が難しい、③近くに高校・大学がないため、学生に直接支援してもらえない、④経費不足が挙げられる。
・教職員の負担という面では、「結クラブ（亜夜久野学園の学習支援を行う地域住民からなる組織）」との活動には先生への負担はないが、活動の準備・実施等で休日出勤になることが負担。

＜アンケート調査＞
・地域の魅力発見という面では成果を挙げている
・課題として、①総合の時間だけでは時間が足りない、②授業の準備が十分にできない、③学校と地域の要求の不一致が挙げられる。

＜考察＞
・学校と地域の間にある溝を埋めるための話し合いの場や仲介役となるコーディネーターを置く必要性。

報告④ 共助・互助による除雪

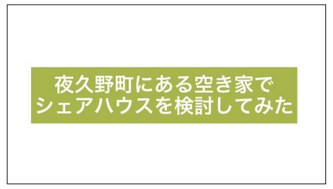
＜背景および目的＞
・困りごとアンケートにおいて、一番の困りごととしてあがった「除雪」問題
・なぜ除雪が困りごとアンケートで一位になるほど困っているのかを明らかにし、その対策を検討

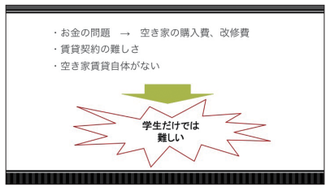
＜インタビュー調査＞
・自治会によって除雪機能の差（除雪機の有無、人数、平均年齢）
・自主防災組織の結成率の低さ（旧3町でもっとも低い）

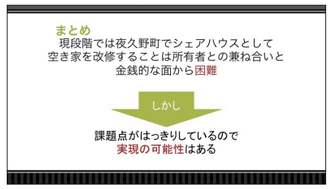
＜先行事例＞
・公助、自助、共助の仕組みの確立
例：島根県飯南町のスノーレンジャー

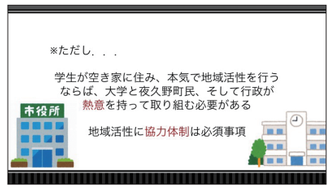
＜考察＞
・自治会の枠にとらわれない独自の防災組織を結成することの必要性
・共助・互助の意識を高める必要性

2









大江町の成り立ちと発展プロセスを分析する

科目名 地域経営演習Ⅰ・ⅡーD（1回生）

担当者名 齋藤 達弘、佐藤 充

本演習の目的

本クラスの演習は、社会調査の手法に基づき、地域の現場に赴いて観察し、地域の方々から生の情報を聞き取る方法を学ぶことを目的にした。そのために、フィールドワークのプロセスを経験させ、地域を深く理解するための姿勢と基礎的なスキルの学修を目指した。また、学生自らで問いや仮説を構築する力の養成を意図した。

本演習の概要

本クラスの演習では、年間を通じて、4つのグループに分かれ、各グループに設定されたテーマの調査を実施した。それぞれグループが担当する調査テーマは、①宮福線と鬼のまちづくり、②京都府立大江高等学校、③由良川と水害、④河守鉱山と北丹鉄道であった。

前期は、フィールドワークのプロセス（事前準備→現地調査→振り返り）を身につけることに注力した。まず、調査の方法論、コミュニケーションの技法、各種データの所蔵源に関する講義を行い、調査対象地域の事前学習に取り組んだ。次に、現地調査（2017年6月）を実施し、行政担当者からのレクチャーを受け、町内の視察を行うとともに、各グループのテーマに沿った情報提供者へのインタビュー調査を行った。その上で、各グループは現地調査で得られた発見事実を整理した報告資料を作成した。

後期においては、学生主体の調査活動が中心となり、グループワークと担当教員との対話が演習時の取り組みとなった。それぞれのグループは、文献や行政資料の収集・分析を繰り返し、適宜、追加でのインタビュー調査を行った。調査活動から得られた結果は、現地での成果発表会（2018年2月）において、地域の方々に報告された。

学生の感想

私は、地域経営演習が大学に入学してから最も厳しい講義であったと感じた。しかし、ただ厳しいというだけでなく、その分やりがいも感じることができ、自分の身のためになるものであった。この演習が、フィールドワークを行った唯一の科目であり、大江支所や住民の方々から実際の声を聞くことができ、さらに現地で発表をすることができたのは非常に貴重な体験であったと感じた。

2回生では、地域経営演習での資料作成や調査における情報収集の方法など、学んだことを無駄にするのではなく、ゼミでの活動に活かすことが重要であると考える。また、調査において、妥協を一切することなく、必要であろう情報は徹底的に集めるようにしていきたい。

地域経営学科　1回生　原口 秀明
東宇治高等学校（京都府）出身

このクラスでの地域経営演習を通して、二つ思ったことがある。一つは、他のクラスよりも、文献や資料の収集といった調査に費やした時間が多いことである。正直、色々な場所に行ってみたかったが、ある対象について調べることは、地道な調査が必要だと実感した。また、インタビューは、ただ行くだけでなく、事前の下調べから出た疑問を確かめるものだと分かった。二つ目は、調査結果を基に、自分なりに意見や考えを持つことの大切さである。自らの意見を持って話すことで、それに同意してくれる人、異なった意見を持つ人の考えを知ることができると思った。

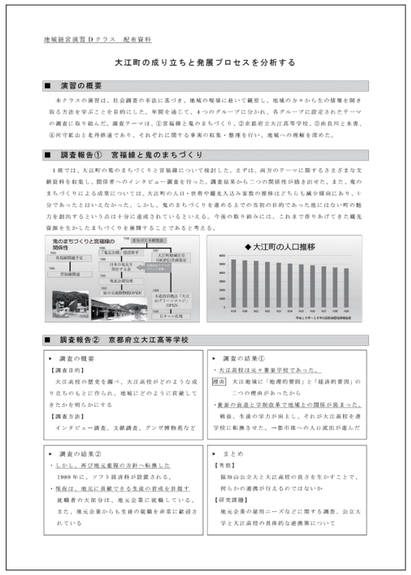
2回生では、調査の手を抜かず、継続して調べ続け、それに基づき自分なりの意見や考えをしっかりと持ちたい。調査の対象や課題は変わるかもしれないが、やることは変わらないので、頑張りたいと思う。

地域経営学科　1回生　石井 興志崇
巻高等学校（新潟県）出身

報告会用資料

大江町の成り立ちと発展プロセスを分析する

地域経営演習Ⅰ・ⅡーD（1回生）



地域経営演習Ⅰクラス　配布資料

大江町の成り立ちと発展プロセスを分析する

■ 演習の概要

本クラスの演習は、社会調査の手法に基づき、地域の現場に赴いて観察し、地域の方々から生の情報を聞き取る方法を学ぶことを目的にした。年間を通じて、4つのグループに分かれ、各グループに設定されたテーマの調査に取り組んだ。調査テーマは、①宮福線と鬼のまちづくり、②京都府立大江高等学校、③由良川と水害、④河守鉱山と北丹鉄道である。それぞれに関する事実の収集・整理を行い、地域への理解を深めた。

■ 調査報告① 宮福線と鬼のまちづくり

1期では、大江町の鬼のまちづくりと宮福線について検討した。まずは、両方のテーマに関するさまざまな文献資料を収集し、関係者へのインタビュー調査を行った。調査結果から二つの関係性が浮上させた。また、鬼のまちづくりによる成果については、大江町の人口・世帯の観点入込み客数の推移はどちらも減少傾向にあり、十分であったとはいえなかった。しかし、鬼のまちづくりを進めるとその当初の目的であった他には ない魅力を創出するという点は十分に達成されているといえる。今後の取り組みには、これまで作りあげてきた観光資源を生かしたまちづくりを展開することであると考える。

地域経営演習Ⅰ・Ⅱ
ー地域協働型実践教育の試みー

科目名 地域経営演習Ⅰ・ⅡーF（1回生）

担当者名 芦田 信之、佐藤 恵

本演習の目的

本授業はフィールドワークを通して学外の諸団体・住民との協働し、地域が抱える課題の背景、現状、また、課題への取り組みについて学び、調査方法やデータ分析の技法を身につけ、また課題解決のための方策を考えることを目的としている。また、2年次より始まる専門教育に向けて、地域からの視点で考え、学ぶ素養を身につけることも目標にしている。

本演習の概要

テーマ設定とグループ分けの経緯　Fクラスは、医療福祉経営学科1年26名からなるクラスである。テーマ設定は、特に医療福祉分野に関わらず地域の課題について学生受け入れをしていただける組織団体とテーマ設定をおこない、2017年前期において、それぞれのテーマ説明のためクラス全体で協力団体から講演に大学に来ていただいて説明会を開催した。これは学生がテーマ選びをするための予備知識を与えるためではあるが、自分が参加していないグループがどのようなテーマで演習をすすめるのかを知っておくためでもある。テーマのひとつに伝統工芸品の伝承のための神社の鳥居模型の販売というものがあるが、大江町の鳥居模型作成の工房や鳥居のある神社とくに福知山にある元伊勢3社への見学をおこなった。その後、クラスにて希望テーマを選択し、グループ分けをおこなった。グループ分け後、各協力団体とともに、テーマの詳細を決めながらできることからスタートした。取り組んだテーマは以下のとおりである。

2017年度地域経営演習Ⅰ・Ⅱ　（Fクラスの取り組み）
担当教員　芦田・佐藤恵

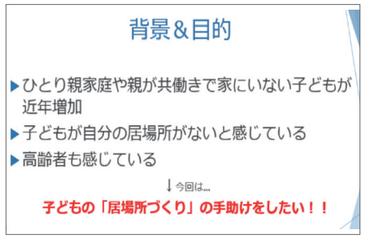
1．防災マップ作製・避難所運営ボランティアグループ
　福知山市社会福祉協議会と協働
2．子供の居場所つくり・高齢者の居場所つくりグループ
　福知山市社会福祉協議会母子会・父子会・自治会サロンと協働
3．生活交通グループ　市まちなか循環バスの利用促進活動
　福知山市生活交通課と協働
4．伝統工芸の継承のための鳥居模型の販売促進活動グループ

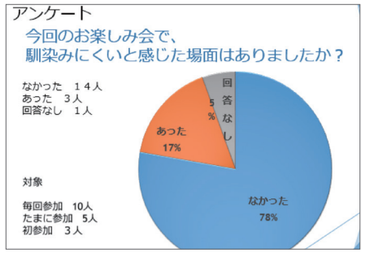
本演習の総括

ほとんどの学生が全国から集まり、北近畿地区の特色や課題についての予備知識のないところから始まった演習ではあるが、1年間、テーマを通して、この地域の課題を見つけ、学生からの視線で提言するまでに至った。発表会以外にも地元で報告会をおこない、賛辞を得た。しかしながら、地域協働型教育は相手がいて成り立つもので、時間的な制約が多く、時間割通りに平日に活動することが非常に困難である。

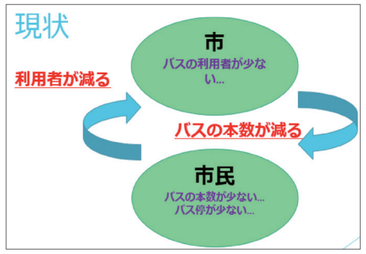
報告会用資料

居場所づくり
榎、北村、小山、芝田、中川、福井、舩田、脇本





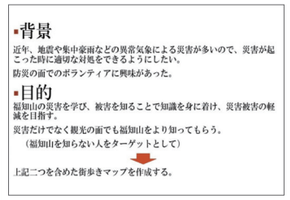
公共交通
山藤、谷口、橋爪、本間



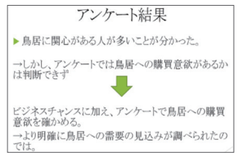
防災の学び
芦田、五十嵐、磯部、岩瀬、岩原、河村、髙橋、西垣、藤枝

京都新聞

公立大生が防災まち歩きマップ
見通し悪い道 危険箇所示す
福知山市社協 助言



鳥居販売
塩崎、津久井、豊田、疋田、藤井



学生の最も身近な組織である「大学」を理解する

科目名 キャリア演習Ⅰ・ⅡーG（2回生）

担当者名 加藤 好雄

本演習の目的

経営学やマーケティングを学ぶにあたって必要なことは、それが実際にどのように役に立つかを考えることである。学生の最も身近な組織である「大学」を対象にどのように経営学は役立つのかを学ぶ。

本演習の概要

2016年度に福知山公立大学が公立大学の仲間入りをし、全国の公立大学は88大学となったが、この四半世紀で行われた公立大学の集中的な設置には3つの背景があるといわれている。第1に地域の進学需要の高まりを背景として多くの公立短期大学が4年制大学に開始されたこと。第2に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が看護医療福祉系の公立大学・学部の設置を促したこと。第3に地域活性化戦略として多様な大学・学部が地域の実情に応じて設置されたことが挙げられるが、いずれにしても公立大学は地域社会が強い要請に支えられ、設置団体は自ら政策目標を定め設置している。また公立大学のみならず教育業界全般にわたっても現在は変革期にある。それは社会が求める人財を育成するには既存の教育システムでは困難であることが要因として考えるが、社会の求める人財を育成することが大学の存在価値である以上、どのような人財が必要とされているのかを考えることは重要なことである。またこのことは、大学の経営者や教育サービスの提供者だけでなく、教育サービスを提供される学生も理解していく必要がある。このために大学を中心にその変化を調べることで、社会の求める人財とはどのような人財なのかということを理解することで、今後学生本人たちがどのような社会人になるのかを考えるきっかけとする。また経営学やマーケティングは仕事・ビジネスのための学問であるが、社会が求める人財にはこの専門領域の能力が非常に重要であることが再認識される。

学生の感想

前学期は経営学の分野で輪読を行なったが、その内容は戦略の形成、組織における人間への対応、組織の枠組み作り等と多岐に渡り、これから本格的に社会人となる上で深く考えさせられるものであった。演習は輪読形式で進行するので、事前に内容に触れる必要があり、そのことがより一層の理解に貢献したように感じた。社会とは人為によるものであり、その積み重ねによって成り立つ。そんな普段大学生活を送る上で気付きにくい当たり前を、再認識できたことは、結果的に良い機会だったのではと思う。来年度からは、仕事・就職のことを意識した1年にしていきたいと思っている。

地域経営学科 ２回生 甲斐 貴大
大分雄城台高等学校（大分県）出身

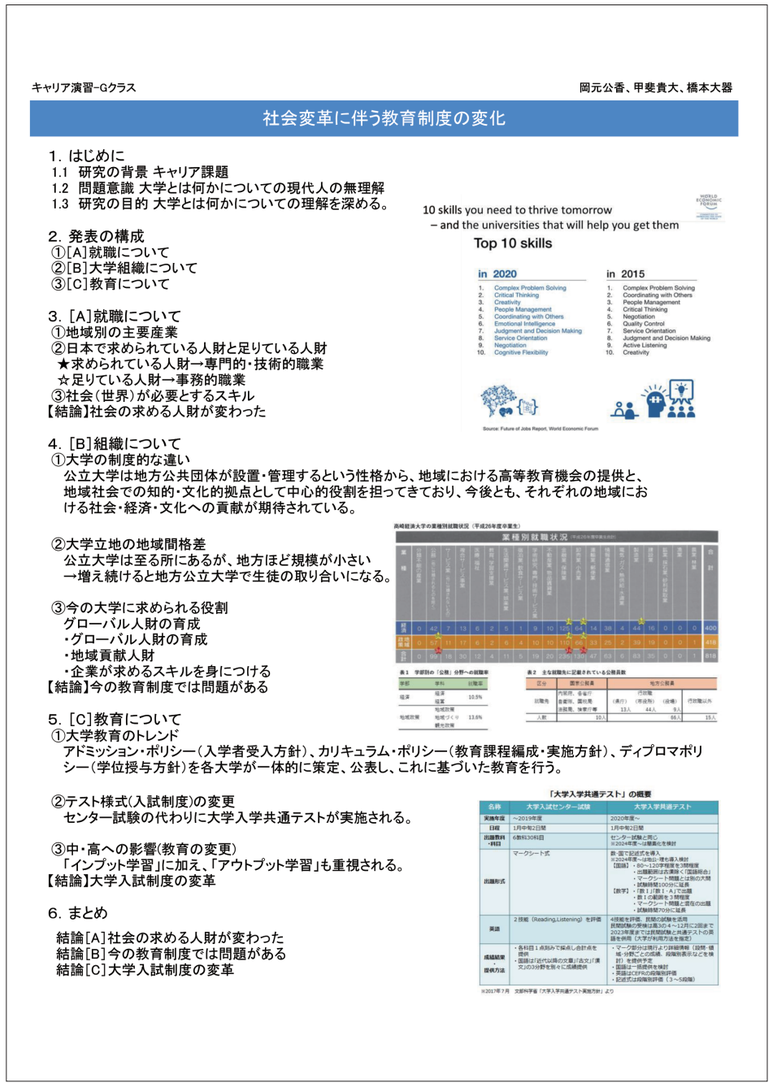
前学期では、経営学入門の輪読をしました。ここでは、これから経営学を学んでいく上で身につけておきたい知識や、レジュメの作成で文章をまとめていくこと、またその過程で必要な事の取捨選択などが身に付きました。後学期では、今後の社会で求められる能力である課題解決の能力や批判的思考法（クリティカルシンキング）など知り、その能力を習得するためにアクティブラーニング等の教育手法が必要なことを学びました。経営学をベースにして1年間を通して学んだことは非常に有意義な時間だったと思います。

地域経営学科 ２回生 橋本 大器
北条高等学校（兵庫県）出身

報告会用資料

社会変革に伴う教育制度の変化

岡元 公香、甲斐 貴大、橋本 大器



キャリア演習-Gクラス　　岡元公香、甲斐貴大、橋本大器

社会変革に伴う教育制度の変化

1. はじめに
1.1 研究の背景 キャリア課題
1.2 問題意識 大学とは何かについての現代人の無理解
1.3 研究の目的 大学とは何かについての理解を深める。

2. 発表の構成
①[A]就職について
②[B]大学組織について
③[C]教育について

3. [A]就職について
①地域別の主要産業
②日本で求められている人財と足りている人財
★求められている人財→専門的・技術的職業
☆足りている人財→事務的職業
③社会（世界）が必要とするスキル
【結論】社会の求める人財が変わった

10 skills you need to thrive tomorrow
– and the universities that will help you get them
Top 10 skills

in 2020	in 2015
1. Complex Problem Solving	1. Complex Problem Solving
2. Critical Thinking	2. Coordinating with Others
3. Creativity	3. People Management
4. People Management	4. Critical Thinking
5. Coordinating with Others	5. Negotiation
6. Emotional Intelligence	6. Quality Control
7. Judgment and Decision Making	7. Service Orientation
8. Service Orientation	8. Judgment and Decision Making
9. Negotiation	9. Active Listening
10. Cognitive Flexibility	10. Creativity

Source: Future of Jobs Report, World Economic Forum

4. [B]組織について
①大学の制度的な違い
公立大学は地方公共団体が設置・管理するという性格から、地域における高等教育機会の提供と、地域社会での知的・文化的拠点として中心的役割を担ってきており、今後とも、それぞれの地域における社会・経済・文化への貢献が期待されている。

②大学立地の地域間格差
公立大学は至る所にあるが、地方ほど規模が小さい
→増え続けると地方公立大学で生徒の取り合いになる。

③今の大学に求められる役割
グローバル人財の育成
・グローバル人財の育成
・地域貢献人財
・企業が求めるスキルを身につける
【結論】今の教育制度では問題がある

5. [C]教育について
①大学教育のトレンド
アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）、ディプロマポリシー（学位授与方針）を各大学が一体的に策定、公表し、これに基づいた教育を行う。

②テスト様式（入試制度）の変更
センター試験の代わりに大学入学共通テストが実施される。

③中・高への影響（教育の変更）
「インプット学習」に加え、「アウトプット学習」も重視される。
【結論】大学入試制度の変革

6. まとめ
結論[A]社会の求める人財が変わった
結論[B]今の教育制度では問題がある
結論[C]大学入試制度の変革

高崎経済大学の業種別就職状況（平成26年度卒業生）

業種別就職状況

	農業・林業	漁業	鉱業・採石業・砂利採取業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業・郵便業	卸売業・小売業	金融業・保険業	不動産業・物品賃貸業	学術研究・専門・技術サービス業	宿泊業	飲食サービス業	生活関連サービス業・娯楽業	教育・学習支援業	医療・福祉	複合サービス事業	サービス業（他に分類されないもの）	公務（他に分類されないもの）	分類不能の産業	計
男	0	42	7	13	6	2	5	1	9	10	125	64	14	38	4	44	16	0	0	0		400
女	0	5	11	17	6	2	6	4	10	10	110	69	33	25	2	39	19	0	0	1		418
計	0	47	18	30	12	4	11	5	19	20	235	133	47	63	6	83	35	0	0	1		818

表1 学部別の「公務」分野への就職率

学部	学科	公務率
経済	経済	10.5%
	経営	
地域政策	地域政策	13.5%
	地域づくり・観光政策	

表2 主な就職先に記載されている公務員数

区分	国家公務員	地方公務員		
就職先	外務省、防衛庁 食糧庁、国税局 会計検査、海上保安庁等	市役所 （県庁）（市役所）（役場） 44人	9人	市役所以外 15人
人数	13人		69人	

「大学入学共通テスト」の概要

名称	大学入試センター試験	大学入学共通テスト
実施年度	～2019年度	2020年度～
日程	1月中旬2日間	1月中旬2日間
出題教科・科目	6教科30科目	センター試験と同じ ※2024年度～は簡素化を検討
出題形式	マークシート式	数・国で記述式を導入 ※2024年度～は国語・英語導入検討 【国語】・80～120字程度を3問程度 ・出題素材は古典除く「国語総合」 ・マークシート問題とは別の大問 ・試験時間100分に延長 【数学】・「数Ⅰ」「数Ⅰ・A」で出題 ・数Ⅰと必選数と・整理度 ・マークシート問題と混在の出題 ・試験時間70分に延長
英語	2技能（Reading,Listening）を評価	4技能を評価、民間の試験を活用 民間試験の受検は高3の4～12月に2回まで 2023年度までは民間試験と共通テストの英語を併用（大学が利用方法を指定）
成績結果の提供方法	・各科目1点刻みで採点し合計点を提供 ・国語は「近代以降の文章」「古文」「漢文」の3分野を等々に配慮提供	・マーク部分は現行より詳細情報（設問・領域・分野ごとの成績、段階別表示など）を開示！を提供予定 ・国語は一部読点を検討 ・英語はCEFRの段階別評価 ・記述式は段階別評価（５～６段階）

※2017年7月　文部科学省「大学入学共通テスト実施方針」より

プロジェクト学習を通じた地域協働型実践教育～東舞鶴をフィールドとして～

科目名 キャリア演習Ⅰ・ⅡーⅠ（2回生）

担当者名 杉岡 秀紀

本演習の目的

本演習は、1人が1プロジェクトリーダーを務め、リーダーシップとフォロワーシップの両方を涵養するプロジェクト学習を通して、政策づくりやプロジェクトマネジメント、地域公共人材としての必要な「コミュニケーション力」「課題解決力」「発想力」等の力を養ってもらうことを目的とした。

本演習の概要

主なフィールドは舞鶴（とりわけ東舞鶴）であるが、2回生の学生7名がそれぞれ1人1プロジェクトリーダーを務めながら、一年を通して様々な地域創生に係るプロジェクト学習を展開した。

前学期は、『ダメな商店街を活性化する8つのポイント』（鈴木健介著）を輪読しつつ、東舞鶴の商店街や商店街再生に関わるNPO法人（MCA）、京都市内の先進事例（古川商店街）のヒアリング調査や意見交換を実施した。また、7～8月に実施した東舞鶴商店街のホラーハウスプロジェクトでは企画段階から参画した。

後学期は、『政策立案の技法』（ユージン・バーダック著）の輪読をしながら、東舞鶴だけでなく、福知山市内の若者×防災に注目・調査し、日本地方政治学会・日本地域政治学会の現代政治学生コンペ（「審査員特別賞」を受賞）や大学コンソーシアム京都が主催する「京都から発信する政策研究交流高い」に出場した。また、この調査研究が学生による防災サークル「福知山公立大学FAST」を設立するに至った。11～12月には京都中小企業家同友会や鳥羽高校との連携のもと「高大社連携研修事業」を実施し、大学コンソーシアム京都が主催する「高大連携教育フォーラム」にて報告した。

最後にこれまで培った力試しや他大学との交流の機会として「全国大学まちづくり政策フォーラム」に出場した。

学生の感想

1年間杉岡ゼミでの活動で、行動力の大切さを知り、大きく成長できた自分と出会えました。しかし、それと同時に新たな課題というものも見つかりました。このゼミに入ると今までとは比べ物にならないほど充実した大学生活になりました。この1年で北海道のゼミ合宿、鹿児島での学会発表など、自分が想像していた以上に大変なゼミでした。しかし、大変な中で自分が成長できたことが多かったです。様々な人と出会い、新たな発見をして、新たな気づきを見つけることができました。3回生になったら今までの成長した自分で、新しいことにどんどん挑戦し、新しい自分に気づいていきたいと思います。

地域経営学科　2回生　古泉 伊織
久美浜高等学校（京都府）出身

僕はこのゼミ活動で、大きく成長できたと自負しています。舞鶴での商店街活性化の活動、北海道でのゼミ合宿、鹿児島と京都での政策コンペ発表、高大社での討論会など多くの活動に取り組んできました。そして、様々な人との交流や活動、杉岡先生の元での学びを通して見識が広がり、世界が広がりました。その中でも特に、僕がリーダーを務めた京都の政策発表会が思い出です。全力で練習しましたが、賞を頂くことができず悔しい思いをしました。他にもリーダーと言う仕事の難しさ、責任を知りました。このままでは終われません。この悔しい気持ちを踏み台にして3回生になっても色々な活動に挑戦していきたいと思います（今度は必ず賞をとってみせます）。

地域経営学科　2回生　田中 友季也
米子高等学校（鳥取県）出身

報告会用資料

プロジェクト学習を通じた地域協働型実践教育～東舞鶴をフィールドとして～

狩山 紘一、蒲生 健一郎、古泉 伊織、小林 拓真、田中 友季也、辻 捺乃、東 佑多朗

運動習慣と健康増進活動

ーヘルスツーリズムを題材としてー

科目名 キャリア演習Ⅰ・ⅡーN（２回生）

担当者名 芦田 信之

本演習の目的

地域の活性化に必要な条件として、雇用や生活環境など経済的・文化的な基盤の整備だけでなく住民の健康を守り、安心安全なまちづくりをおこなうことも重要である。世界保健機構WHOによる健康の定義を引き合いに出すまでもなく、「健康とは単に病気でない」ということではない。地域医療・地域福祉の充実だけでなく、地域住民の疾病予防や健康増進活動など「健康」にまつわる研究題材は数多くある。健康であるために必要な運動・栄養・休養の中で、健康テーマを題材にして文献調査や個別調査にてデータを収集し、分析・評価をおこない、健康指標化を試みることにより必要な技能を身につけることを目的としている。

本演習の概要

本演習は、健康をテーマとした専門研究・卒業研究のためのプレ演習と位置づけている。ニューツーリズムにおける里歩き山歩きのヘルスツーリズムを題材として地域に出てデータを集め分析・評価をおこなった。演習の組み立ては以下のとおりである。

ニューツーリズムとヘルスツーリズムの背景の調査
「運動は健康に良い」というエビデンスとなる文献調査
運動による健康づくり：消費カロリーと摂取カロリー
自己管理型健康増進活動　生活習慣を見直す
アクティブウォッチを活用した運動習慣のエビデンスづくり
（大江山登山による運動量計測　心拍、血圧、歩数、坂道、消費カロリー計測を含む）
市民公開講座―京都高齢者大学での講演会参加
与謝野町「かや山の家　ヘルスツーリズムの里」活動への合宿参加
与謝野町「よさのみらい大学」への参加

本演習の総括

予防医学のうち、一次予防策は健康増進活動である。適正な運動・栄養・休養つまり生活習慣を見直すところから始まる。この演習では自分の生活習慣をデータから見直すことに主眼を置いた。医療福祉分野での職に就く予定の学生が、自己管理型の健康増進活動を体験することにより、将来指導的な立場に立つ際の経験となると考える。このテーマは次年度に引き継ぎ、「ヘルスツーリズム健康の里つくり」という健康増進を観光の軸とした観光資源開発という地域活性化（観光によるまちづくり）への発展を願っている。

報告会用資料

健康になるための運動方法

宮島 啓吾、牧 浩太、山﨑 有里

伝統文化の観光資源としての活用

和紙伝承館での手漉き研修から

科目名 キャリア探究Ⅰ・ⅡーA（3回生）

担当者名 平野 真

本演習の目的

福知山市中心市街地（商店街）の活性化や観光産業の振興を念頭に置いて、地元の伝統工芸である大江二俣和紙、夜久野漆・漆器、福知山藍染などについて文献を通して学ぶとともに、実際に現地を訪問して制作技術などを体験研修する。また３回生なりに学んできた専門知識を活用して、伝統工芸をどのようにしたら維持・継続でき、観光資源として活用できるかを考える。

本演習の概要

環境会議（市民環境保護団体）との交流

制作した和紙灯篭の
夜久野高原祭への出品展示

1）伝統工芸のフィールド調査：地元福知山市の伝統工芸である大江二俣和紙、夜久野漆・漆器、福知山藍染などについて文献を通して学び、技術の発祥、伝承、進化、課題などを学んだ。そのうえで実際に大江二俣和紙については、和紙伝承館を訪問し、和紙工芸家の田中義弘氏に和紙文化や産業としての現状についてヒヤリングを行った。また実際に手漉きの研修を受け、理解を深めた。こうしたことを踏まえて、３回生なりに学んできた専門知識を活かしながら、伝統工芸の課題である後継者不足、産業としての難しさ、伝統文化の維持・継続方法などについて考えた。

2）観光資源としての見直し：学生の一人は特に地域の中心市街地問題に関心が高く、伝統工芸を観光資源として活用すること、そのことによって商店街を活性化できないかと考えていった。これに関連して教員側でもアイデアを出し、具体的な体験型伝統工芸研修ツアーの企画を案出し、アンケート調査などを行った。こうした具体的な企画に結びついていったことは有意義であった。

３）交流活動：伝統文化の継承には、地元の人々の認知や共感が重要である。特に若年層の郷土意識の醸成にも、伝統文化の教育・啓発が欠かせない。そこで、市民や弱戦争との交流や協働を通して、伝統文化の啓発活動を行った。具体的には、下級生や地元の小学生、中学生と和紙灯篭を制作するプロジェクトに参画し、子供達に和紙文化の重要性を伝え交流する体験を積んだ。また、和紙灯篭を竹林に飾るイベントを共催する環境会議（市民環境保護団体）の方々とも交流を行った。

４）教員側の振り返り：この科目の対象学生には外国からの留学生も多く、留学生ならではの感性や視点をいかに生かすか、留意した。日本の伝統工芸を取り上げたのもそうした意図がある。しかし1年では思うように深堀もできず、果たせなかった教育課題も多い。

報告会用資料

地元の伝統文化を観光に活用しよう！

吉田 哲平、山下 渉、劉 艶平、伍 亮、遠藤 敦也

地元の伝統文化を観光に活用しよう！

福知山公立大学

福知山公立大学地域経営学部3回生キャリア探求IIA（担当教員：平野真）

和紙が存続してきた理由　吉田哲平

和紙は飛鳥時代から楮などを原料に手漉きによって作られ、文書の記録や仏教を広めるために使われていた。その時はまだ貴重品であるために一部の人間しか扱うことができなかった。

江戸時代（1600年頃）から、江戸の町人達に紙が普及し始め需要は大きく増加する。それには障子、ちり紙、雑など の生活必需品としての需要に加えて、大衆文化としての出版物の発展が大きく関わっている。

明治時代になってパルプという植物繊維から紙を作る方法が欧米から伝わった。これが洋紙であり、機械で大量生産ができてさらにコストも低い洋紙の製造が盛んになる。

現代は電子化によるペーパーレスが進み紙自体の存続も危惧されるが、やはり機械漉き和紙を安め和紙の生産量は減少している。一方、2014年に手漉き和紙技術が無形分解世界遺産に登録されるなど、明有名な出来事もあったが、手漉き和紙職人の高齢化と後継者不足は深刻な課題となっている。　引用：http://www.washiya.com/washinomokuji/0012.html

伝統工芸を今後も存続させるにはどうしたらいいか？　山下 渉

・日本の伝統工芸の衰退問題
・職人の高齢化・後継ぎ不足
・原材料の不足・値上がり
・需要の低迷
・今の若い人たちに伝統工芸の魅力を知ってもらう必要がある
・国や地方自治体の協力が必要不可欠
・日本の伝統工芸のすばらしさを発信
(出典元)
http://karakurijapan.jp/2017/01/08/dentoukougei/

伝統工芸二俣和紙と地域の関係　劉艶平

1. 福知山市には伝統工芸としての丹後二俣和紙があり、大江町和紙伝承館ではその技術を保存継承し、予選の研修も行っています。
2. 和紙文化はもともと『日本書紀』の時代にさかのぼります。継体天皇7年には、『漢字』と『仏教』の普及で紙漉がいたと推測されます。
3. 高温多湿という日本の気候の特徴のため、日本の家屋は木材と藁とさと和紙によって造られてきました。和紙は、日本家屋で、湿度と温度の調節を行うのに適した素材でした。
4. しかし、明治時代以降、日本の建築様式も変わり、和紙の消費量が減少しました。いまでは、産業としての継承維持のため、後継者不足という問題も起きています。

和紙：
https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2RiKnFoPHkao0QaFAXUSuV7?p=和紙&ei=1&oq=&ei=UTF-8

藍染とその歴史　伍亮

1. 日本藍染は飛鳥時代からの歴史を持ちます。
2. 藍染の制作は、夏の熱い日に行います。
3. 藍染の原料は蓼を植え丁寧に栽培します。
4. 原料につく平虫の防止が大変です。肥料も高価です。
5. 藍染を制作するときは、きつい匂いがするので、マスクを着用する必要があります。また、高温にも注意が必要です。
7. 藍染の伝承は、現在福知山では細々と行われています。

藍染：
https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2RCLSEFN1xu02cXAxcUSuV7?p=藍染&ei=1&oq=&ei=UTF-8#mode%3Ddetail%26index%3D24%26tr%3D0

商店街地域活性化の難しさ　遠藤敦也

・成功事例の真似は、大きな痛手を負う可能性
・失敗事例：島根県出雲市中町商店街
・商店街に出店が増えない理由：メリットよりもリスクが上回る
・全国の商店街活性化活動に対する疑問点
・福知山での地域活性化活動のポイント

伝統工芸ツアーの開催によって地域活性化に一役買えるのではないであろうか

伝統工芸体験ツアーの企画

週末の土日に１泊2日で、福知山での伝統工芸体験ツアーを実施する
１日目：二俣和紙の講習と手漉研修。夜は、民泊。
2日目：午前中は漆掻きの講習と漆器蒔絵研修。
　　午後は藍染の講習と絞り染研修

東京で３０代の男女３０名にアンケート調査を実施
デザイン系の人が多かったせいか、８割以上の人が関心を示す

学生の感想

1年間キャリア探究を学習してきて様々な事を学んだり体験したりしてきました。前期では灯篭作りと大江町毛原地内の体験学習を行いました。前期で最初に行ったのは灯篭作りです。授業の関係もあり1年生・2年生と一緒にすることは少ししかありませんでしたが楽しくできたので良かったです。一緒に灯篭を作ることはとても大切な授業だと思いました。私は灯篭作りがとても難しいことだと思っていましたが、意外にも簡単に出来上がることがすごいと感じました。灯篭作りは初めてだったのでとても良い体験だったと思います。私は先輩として一回だけでしたが1年生・2年生の生徒さんたちに灯篭の模様の作り方を教えました。灯篭を作って感じたことは相手に伝わるような教え方が大切な事だと思い今後の学習に発展させていきたいと思いました。（中略）後期では和紙について研究をしました。最初に日本和紙の歴史について本で調べました。和紙は古く昔からあることを知りました。私たちは大江町にある和紙伝承館という所へ行き和紙についての勉強をしに見学に行きました。そこで和紙の原料や和紙が作られるまでの流れなどを知ることが出来ました。和紙の説明を聞いた後、紙漉きの体験をしました。私が思ったことは、一つ一つ手作業で行われているのでとても大変なことだと感じました。時間をかけて作られることがすごいと思いました。一つ一つ丁寧に手作業で行われている職人の技を見てとてもすごいことだと感じました。1年間キャリア探究を学習してきて初めてのことばかりを体験してきました。（中略）キャリア探究は様々な体験をすることが出来たと思います。今後私は4年生そして社会人になります。このキャリア探究で大切なことを学んだうえでこれからもなにか発展が出来たらいいと思います。

地域経営学科　３回生　山下 渉
福知山淑徳高等学校（京都府）出身

今回、キャリア探究を通じて、本質を見通して物事に常に疑問を持つことの大切さを知った。自分は、この大学にやってくるまでは、表面上で行われていることや実際の現場の声などすべてが真相で疑いもなく鵜呑みにしていた部分があった。そんな中で、福知山の商店街の話をキャリア探究の中でいくつか聞く中で、表面で感じることだけでなく、中に切り込んでいくことや裏では本当はどう思っているかということを考えていかないといけないことを学んだ。福知山の商店街では、インタビューを行ったときに商店街がもっと発展することを望んでいるとどの人も口にするが、その中でもそのように思っているひとはごく少数である事実を知った。自分も商店街に店を出店していて、そのようなインタビューを受ければそのように回答すると思った。実際のところは、商店街の復活は非現実的なものと思っていたり、現状の環境に満足もしくは変化を望まなかったりと極端な言い方をすればやる気がなかったりするのだ。そのように商店街の問題をはっきりと見抜く力というのは今までの自分にはなかったことだと思う。また、いつまでも良い部分しか見れず、悪い部分を疑視できない甘えのようなものは今後社会に出ていったときに捨てていかなければならないものだと感じた。

地域経営学科　３回生　遠藤 敦也
大月市立大月短期大学（山梨県）より編入学

理論と臨床政策を往還する Community Based Learning ～与謝野町をフィールドとして～

科目名 キャリア探究Ⅰ・ⅡーD（3回生）

担当者名 杉岡 秀紀

本演習の目的

本演習では、昨今その活用が推進されている学外教育資源について、どの程度の地域間格差が存在しているのかを調査し、そこに生じうる課題について教育の機会均等の観点から考察することを目的とする。なお、調査にあたっては京都府を対象とし、主に京都府北部地域と南部地域の教育条件の差について検討した。

本演習の概要

主なフィールドは与謝野町（加悦地区）であり、3回生の学生2名で活動した。具体的には『人と街の未来をつくるワークブック』（草津コミュニティ財団著）を輪読しつつ、与謝野のちりめん街道活性化のためのプロジェクトに参加した。とりわけ前学期（6月11日）には「ちりめん街道きものマルシェ」に調査担当として参加した。その際に来場者アンケート調査を実施し、実行委員会にフィードバックした。後学期は「与謝野きものでぶらり」（10月22日）に調査担当とし参加し、来場者アンケート調査を実施する予定であったが、雨天で中止になり、「ちりめん街道ひなめぐり」（3月5日）に同内容を振り替えた。また、加悦地区で開催された市のアクティブワーキング事業（11月28日）に部分参加し、京の豆っこ米の肥料工場見学を通して、加悦の地域資源を確認できた。最後にこれまで培った力試しや他大学との交流の機会として「全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺」という政策コンペにも出場し、今川晃記念賞を受賞した。

学生の感想

この演習は 受講した学生が全員公務員志望であったため、座学では地方公務員の働き方が分かるような書籍を題材に、まちの課題に対して住民、自治会、行政の視点から、解決に向けてどのように対処して行くかを毎回討論しました。毎回政策のメリットやデメリット、自分たちでは考えに及ばなかったアイデアや気づけていなかった問題点などを多く学ぶことができました。また、フィールドワークでは、与謝野町を中心に地域のイベント運営に参加しました。実際に自分の目で見て体で体験することにより、学びが深まったと感じています。

地域経営学科 3回生 藍畑 祐介
田辺高等学校（和歌山県）出身

この演習は大きく座学とフィールドワークに分けられます。座学ではまちの課題について自分たちのまちと比較しながら議論を行いました。フィールドワークでは与謝野町を拠点としてイベントの内容を考えたり、アンケート調査を行い、結果を分析して報告を行いました。この講義ではまちについての考え方を行政、市民の視点で学び、考えることができたりイベントの裏側を知ることができたりととても充実していて有意義なものとなりました。また杉岡先生の経験談もとても貴重な情報で毎回楽しみにしていました。

地域経営学科 3回生 小谷 祐史
八鹿高等学校（兵庫県）出身

報告会用資料

理論と臨床政策を往還するCommunity Based Learning～与謝野町をフィールドとして～

藍畑 祐介、小林 祐史

経営理論の実務への応用に関する演習

科目名 キャリア探究Ⅰ・ⅡーF（3回生）

担当者名 三品 勉

本演習の目的

文献での経営戦略の事例検討と多変量解析の基礎的概念を学んだ後、実際の事例で具体的なビジネスデータのまとめ方について演習を行う。木製鳥居模型の販売促進について、共分散構造分析を活用して、需要がどのくらいあるのか、また販売促進のための手段はどのようなものがあるかなどの調査を行う。

本演習の概要

一般に新規ビジネス推進に関する意思決定には「ひらめき」とその「確認」のプロセスが伴う。前者は事業環境を主観的にまとめるものであり、後者は事実をデータとしてまとめた後の客観的な判断である。少なくともこの両者が満足されれば、健全な事業遂行の可能性が高まる。しかし事業者が必要とする直截的な情報は少ない。むしろ存在しないのが普通であり、もし存在すれば誰もが同じ結論に達する。共分散構造分析を活用して必要とする情報を自ら作り出すことが課題である。

本鳥居プロジェクトは1年生の実践教育演習と共同で行ったもので、福知山市内のある企業の新規事業を、経営管理面で支援することを目指した。わずか日産1基の宮大工が作成する高級木造模型の販売促進案の提言である。1年生は販売方法を中心に、また3年生は顧客の需要予測分野を分担した。もともと高齢化している宮大工の技術継承が目的の事業であり利益の追求は二の次と伺い、演習プロジェクトとして引き受けたが、結果は取り組み時間数が圧倒的に不足していた。方法論の確認はできたが、今後モデルを変更し、調査精度を上げなくては実用化しない。結果の報告責任に関して、今後の市民との共同作業の在り方に関する課題が浮き彫りになった。

学生の感想

私たちのクラスでは、1回生と共同で大江町の宮大工さんが行おうとしていたミニ鳥居販売に携わることとなった。ミニ鳥居を販売するにあたって、私たちはホームページ作成などの販売チームと、市場参入への可能性を調べる分析チームに分かれて活動を行った。販売チームは、ホームページとBASEを利用した販売システムを完成させ、分析チームも鳥居に関心がある人が購入してくれるという仮説を立て、販売を始めたが、二ヶ月ほどで一つしか売れなかった。これは販売システムを見直す必要があり、分析についても内容不足が多く、反省点が見つかり、市場参入の厳しさを感じた。市場参入には、多くの時間を費やし、緻密な分析が必要だと学んだ。

地域経営学科 3回生 山口 純輝
近畿大学短期大学部から編入学

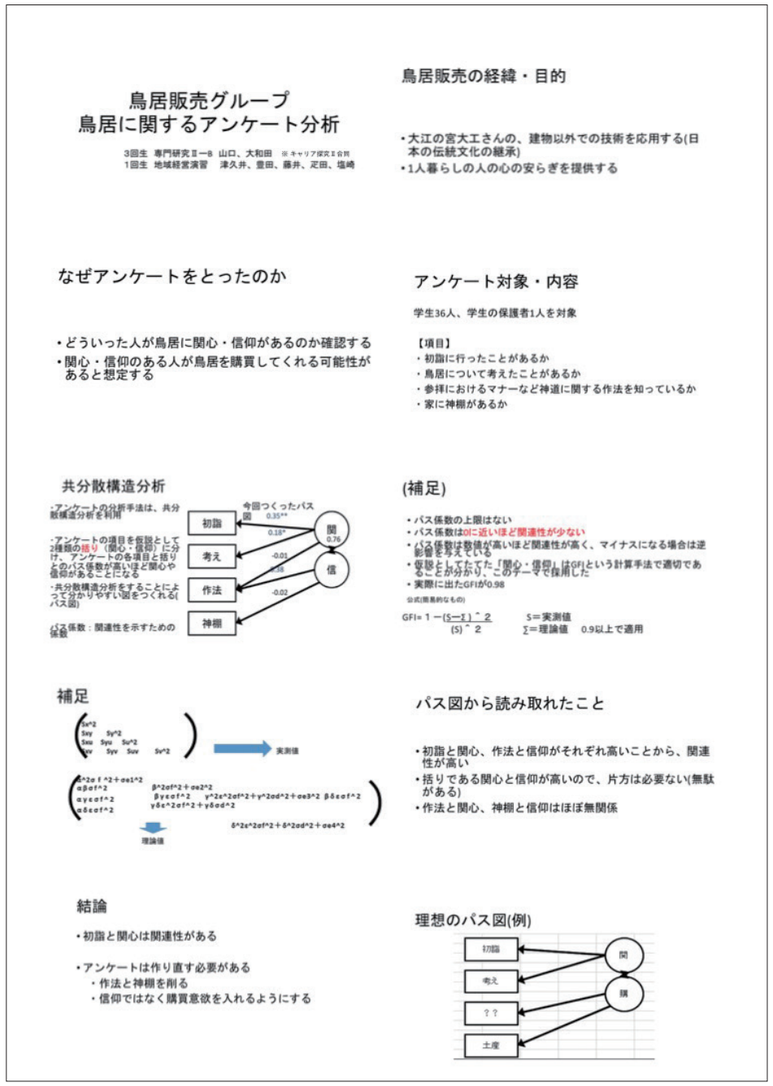
私が履修した専門研究B-Ⅱでは、インテリア用の小型の鳥居を販売するという事業の販売戦略を考えて、他ゼミの1回生との共同で実際に販売するまでを講義の中で行った。販売においては「BASE」というサイトを利用してネット販売を行った。以上のことを振り返り、まず私が考えることは、3回生として他ゼミの1回生を十分に引っ張っていくことができなかったと反省している。販売チャネルをインターネットとすることは想定したが、具体的にどのサイトを利用するのかなどを考えられなかった。受注体制はうまく考えられたが、販売者に具体的な利用方法を伝えられなかったことなどは、反省点として次回に活かしたいと考える。

地域経営学科 3回生 大和田 耕平
大月市立大月短期大学（山梨県）より編入学

報告会用資料

鳥居販売グループ　鳥居に関するアンケート分析

山口、大和田、津久井、豊田、藤井、疋田、塩崎



「福知山マラソンＡｔｏＺ」と「個別ＡｔｏＺ」の制作

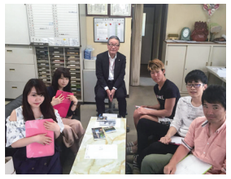
科目名 キャリア探究Ⅰ・ⅡーH（３回生）

担当者名 塩見 直紀

本演習の目的

福知山マラソンをテーマに、魅力、独自性など、Ａ～Ｚまでの26のキーワードをまとめたミニブック「福知山マラソンＡｔｏＺ」を制作。第27回大会の全ランナー（約１万人）に配布。成果物が福知山の「新たな地域資源」となり、福知山マラソンの魅力を見える化、１冊に編集することで福知山ファン、マラソンファンが１人でも増えることに寄与することを目的とした。

本演習の概要



【福知山マラソンＡｔｏＺの制作】４月～７月の間、ランナー、担当事務局、陸連、メディア、ボランティア地域、地域産物の記念品制作者などをインタビューし、キーワードを収集、26にセレクトし、分担執筆した。11月23日の第27回大会の全ランナーに配布。当日は大江町二箇下地区のボランティアの応援をおこなった。1万１千部制作。

聞き取り調査詳細、５/９＝大橋尚哉さん（大学事務局）マラソン完走、５/16＝大槻博路さん（画家）、折返し点・二箇下のもてなし、５/30＝森下時彦さん（森下建設社長）、キッズ伴走、６/13日＝八木俊樹さん（両丹日日新聞部長）取材秘話、６/20＝伊藤義信さん（みたけ農産社長）、ひょうたん記念品苦労話、７/４＝米井勝秀さん（京都陸協副会長）、大会歴史など、７/11＝市スポーツ振興課（マラソン実行委員会事務局）歴代事務局から創意工夫・イノベーションについて。

【個別ＡｔｏＺ制作】福知山をテーマに、学生が個別にテーマ設定し、ＡｔｏＺの編集手法で1冊制作する課題も後期を中心におこなった。6名が選定したテーマは、福知山まちづくり（施策）、ＳＮＳ映え、Ｒ９（夜久野～川口）、福知山成美高、福知山と中国語、千原兄弟（タレント）。

学生の感想

福知山マラソンと地域の方の関わり方、協力の仕方に、自分の想像以上の支援がなされていて、感動しました。どうしたら福知山マラソンが日本で1番のマラソン大会になるかと考えました。この課題はなかなかむずかしいのですが、田舎の街を舞台とするマラソン大会を通じて観光・交流の人をどうしたら増やせるか、今後も考え続けていきたいと思います。「個別テーマで1冊」という課題では、福知山限定のテーマを自分がどう決めるのかが難しかったです。最初は「肉の町」を検討しましたが、最終的には福知山出身の「著名人」をテーマに26キーワードで表現しました。この授業を受けたことで、地域活性化、まちづくり、地域の人との関わり方を学ぶことができました。

地域経営学科 ３回生 川尻 一平
創成館高等学校（長崎県）出身

３年編入で福知山にやってきて、福知山マラソンがどのようなものかわからない状況からのスタートでした。マラソン事務局（市職員）、メディア、ボランティア地域など10名の方に聞き取りをするなかでだんだんと福知山マラソンの魅力が見えてきました。地域の方の「ランナーのみなさんに対する熱意や温かさ」というものを特に学びました。マラソンによって地域が盛り上がるのだと感じました。個別テーマで福知山を題材に１冊にまとめることは、地域をまったく知らないなかでのスタートでなかなか大変でした。私のテーマは福知山の施策、まちづくりをＡｔｏＺの26のキーワードで表現することでした。足を運び、いろいろな方の話をうかがうことでこの街のことをよく知ることができました。

地域経営学科 ３回生 中島 美波
大月市立大月短期大学（山梨県）より編入学

報告会用資料

地域のX（光）の見える化「福知山マラソンAtoZ」と「個別AtoZ」の制作

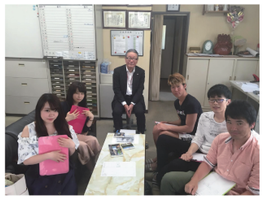
朝倉 慎也、于 群、川尻 一平、久保 杏由子、中島 美波、野間 亮太

キャリア探究Ⅰ・Ⅱ-H 「地域のＸ（光）の見える化」
「福知山マラソンＡｔｏＺ」と「個別ＡｔｏＺ」の制作

朝倉慎也、于群、川尻一平、久保杏由子、中島美波、野間亮太
（福知山マラソン完走者）

本演習の目的

福知山マラソンをテーマに、魅力、他のマラソン大会にはない独自性など、Ａ～Ｚまでの26のキーワードをまとめたミニブック「福知山マラソンＡｔｏＺ」を制作。第27回大会の全ランナー（約１万人）に配布。福知山マラソンの魅力を１冊に編集、「見える化」「再提示」「再定義」することで福知山ファン、マラソンファンが１人でも増えることに寄与し、成果物が福知山の「新たな地域資源」となることを目的とした。



森下建設・森下時彦社長へのインタビュー
（応援KIDSランナーについて、2017年5月30日）

本演習の概要

ミッション１（全員）

【福知山マラソンＡｔｏＺの制作】
2017年４月～７月の間、ランナー、担当事務局、陸連、メディア、ボランティア地域、地域産物の記念品制作者等をインタビューし、キーワードを収集、26にセレクトし、分担執筆した。
11月23日、第27回福知山マラソン大会出場の全ランナーに配布。大会当日はインタビューをお世話になった大江町二箇下地区のボランティアの応援を全員で終日おこなった。
発行部数：1万１千部。

昨秋完成したミニブック「福知山マラソンＡｔｏＺ」
（ご希望の方には進呈いたしますのでお声かけください）

聞き取り調査詳細（2017）
５/９＝大橋尚哉さん（福知山公立大事務局）
福知山マラソン完走（コースの特徴や他との違いなど）
５/16＝大槻博路さん（画家、二箇下地区）
折返し点・二箇下のおもてなし、地域連携など
５/30＝森下時彦さん（森下建設社長）
応援KIDSランナー（福知山マラソンの独自性）
６/13＝八木俊樹さん（両丹日日新聞部長）
メディアの観点、取材秘話など
６/20＝伊藤義信さん（みたけ農産社長）
ひょうたん記念品の苦労話など
７/４＝米井勝秀さん（京都陸協副会長）
大会歴史など
７/11＝市スポーツ振興課
（マラソン実行委員会事務局、歴代事務局）
創意工夫・イノベーションの歴史について

ミッション２（個別）

【個別ＡｔｏＺ制作】
テーマを「福知山」に限定。学生が個別に編集テーマを設定。ＡｔｏＺで本質を探る編集手法で1冊制作する課題。後期を中心におこなった。

●6名が選定したテーマ：
＊朝倉慎也＝
「国道９号線（夜久野～175号線分岐地点）ＡｔｏＺ」
＊于 群＝
「福知山×中国語ＡｔｏＺ」
＊川尻一平＝
「千原兄弟ＡｔｏＺ」
＊久保杏由子＝
「福知山のＳＮＳ映えＡｔｏＺ」
＊中島美波＝
「福知山まちづくり（施策）ＡｔｏＺ」
＊野間亮太＝
「福知山成美高校ＡｔｏＺ」

2017年度
地域協働型実践教育成果報告会

京都府及び兵庫県の北部地域を中心とし、1年を通してさまざまなフィールドワーク活動を行い、その成果報告の場として平成30年2月17日（土）に地域協働型実践教育成果報告会を実施しました。1回生は6クラスに分かれて、各クラス30分程度の発表を行いました。2回生以上は、ポスターを作成し、取り組み内容について説明を行いました。

発表内容は、地元地域や商店街の実態調査をはじめ、文化財保護の現状と課題、観光関連施設の活用と観光地域づくりの提案、教育制度の変化や学習指導要領改訂に対応した地域学習の方法、ふるさと納税制度の考察、財務諸表の作成と利用者に与える影響、健康になるための運動方法、北近畿地域における医療・介護資源の現状など、様々なテーマで発表を行いました。

2017年度 地域協働型実践教育報告会　スケジュール

1回生

発表形式：プレゼンテーション
場　　所：4階401教室

10:30　報告会前半開始、開会あいさつ
10:35　Cクラス発表
11:10　Eクラス発表
11:45　Fクラス発表
12:15　前半の部　全体講評

12:20～13:00　休憩
13:00～13:35　ポスター発表見学

13:40　報告会後半開始、Aクラス発表
14:15　Bクラス発表
14:50　Dクラス発表
15:20　後半の部全体講評、閉会挨拶
15:30　閉会

2回生

発表形式：ポスター発表
場　　所：3階　各セミナー室

13:00　1回生の見学者への発表時間
13:35　1回生の見学者への発表時間終了
13:40　2回生以上の見学者への発表時間
14:30　発表時間終了

2017年度
学生プロジェクト

“地域協働型実践教育学生プロジェクト２０１７”では、地域を対象とする自主的活動の中から、地域特性を活かし、成果が期待できる取組みをプロジェクトとして選定し、支援および助成しています。

本プロジェクトでは、地域との協働を核に、本学での学びを発展的に展開するような取組みや地域における活動、地域住民・行政機関等との協働で展開できる取組み等により成果が見込まれるものを採択しています。

2017年度に採択されたプロジェクトは右記の5件となります。

01 子ども食堂

ふくちやま子ども食堂は子どもたちへの居場所の提供、食事・学習支援、保護者の負担軽減などを目的に活動を行なっています。
11月の初回開催を皮切りに3月まで原則毎月1回開催をしています。
実施内容はゆらのガーデン内のあげパンパンを会場に3時間の間食事や勉強、大学生との交流を行なっています。
成果は3月の開催後に保護者に向けたアンケートなどを通じて調査予定です。

02 由良・安寿亭フェス

「ゆら・安寿亭フェス」は、宮津市丹後由良地区の特産品をPRし、イベントを通じて住民の方々に地域に対する誇りや活力を与えることを目的に、安寿亭と学生が協力し、実施したプロジェクトです。安寿亭の方々との打ち合わせや学生考案メニューの試作を重ね、11月のイベントでは由良地区の特産品を使用した「由良オリーブたっぷりピザ」や「摘果おにぎり」、地元野菜の販売を行ったり、地域の方々を対象にイベントに関するアンケート調査を行いました。プロジェクトを通じて、地域の方々からは学生との交流に前向きな意見をいただくこともできました。

03 ふくちやま デザインチャレンジ

ふくちやまデザインプロジェクトは、デザインに着目した地域資源のPRを目的に活動しています。2017年10月には、講師を招いたデザイン講座を開講し、デザインへの理解や関心を深めました。また、2018年からは、地元農業生産法人と、万願寺とうがらし商品企画の立案、地元工務店の空き倉庫活用案の構想をおこないました。デザインを通じて多くの方々と交流が生まれました。地域資源の周知・発展に携わることができて嬉しいです。

04 IKURA

京都北部の伝統について、体験する機会の創出と、職人への取材を通じたフリーペーパーでの情報発信を活動目的としています。10月の与謝野町のちりめん街道での着物イベントに向けて企画提案、イベントのPRを学生７人で行いました。また、フリーペーパーについて、ものづくりに関わる人々を、作り手・売り手・使い手の三者に分けて取材を行いました。1000部発行を目標とし、福知山内外に向けて情報発信を行います。

写真１：福知山のパティシエさんから依頼をいただき、商品のパッケージデザインと販売のお手伝いを行いました。
写真２、３、４：ちりめん街道での着物イベントに向け、事前学習や写真撮影を行いました。
写真５：フリーペーパーを作成風景です。

5

05 ぷらすあるふぁ

当プロジェクトは、綾部市で開催される予定の「小さなアースデイin里山ねっと・あやべ2018」で、体験を通じて環境について考えることのできるブースの運営を目的に活動しています。今年度は、ブース内容の決定、スタッフの育成等をおこないました。内容としては、トイレットペーパーの芯を使った工作とし、アースデイ当日までの期間に、児童館で実際に子ども達に学んでもらう教室の開催も予定しています。

福知山公立大学関連

新聞等掲載記事一覧

両丹日日新聞

1 両丹日日新聞20170408【219人がチームで市内探索】
2 両丹日日新聞20170418【デザインと観光のミニブックを作成】
3 両丹日日新聞20170527【和紙で灯ろうを作るワークショップ】
4 両丹日日新聞20170627【地元企業の応援にカタログを制作】
5 両丹日日新聞20170703【土曜夜店に子らの歓声】
6 両丹日日新聞20170713【仲良し6人福知山を元気に-1】
7 両丹日日新聞20170713【仲良し6人福知山を元気に-2】
8 両丹日日新聞20170715【空き家をシェアハウスに】
9 両丹日日新聞20170718【学び、習い、踊ろう】
10 両丹日日新聞20170804【福知山市議会で生の学習】
11 両丹日日新聞20170818【20日に蛇ヶ端藪で光のプロムナード祭】
12 両丹日日新聞20170822【魅力あるまちにするには】
13 両丹日日新聞20170825【散歩道に優しい光の列】
14 両丹日日新聞20170916【福知山まちなかフェス】
15 両丹日日新聞20170925【市民と学生の交流促進を】
16 両丹日日新聞20170927【活動紹介など通じ交流】
17 両丹日日新聞20171026【福知山公立大学生が30日から子ども食堂】
18 両丹日日新聞20171101【福知山の魅力や欠点は】
19 両丹日日新聞20171115【若者の政治参加促すには】
20 両丹日日新聞20171116【福知山マラソンの魅力ミニブックに】
21 両丹日日新聞20171125【「子ども食堂」始まる】
22 両丹日日新聞20171207【子どもらとともにみらいを語る集い】
23 両丹日日新聞20171211【Uターン促すホームページ】
24 両丹日日新聞20171213【日本協働政策学会が福知山で今年度大会】
25 両丹日日新聞20171215【地域の活性化を考える】
26 両丹日日新聞20171220【ひとり親家族がクリスマスの集い】
27 両丹日日新聞20171227【公立大生と高齢者が交流】
28 両丹日日新聞20180125【移住検討者らへ魅了発信】
29 両丹日日新聞20180202【独自の目線で防災マップ】

京都新聞

1 京都新聞20170405【まちの大学・地域とのつながり模索】
2 京都新聞20170408【学びのまち 歩いて触れる】
3 京都新聞20170502【福知山の魅力 ミニブックに】
4 京都新聞20170528【「手づくり市」盛況】
5 京都新聞20170621【商店街にキャンパス】
6 京都新聞20170703【龍谷大生、公立大生と交流授業】
7 京都新聞20170708【お化け屋敷　住民ら手作り】
8 京都新聞20170711【学生に住まい　まち活性化を】
9 京都新聞20170714【夜久野の魅力学ぶ】
10 京都新聞20170927【福知山公立大 活動報告会】
11 京都新聞20171020【ちりめん街道 若者興味を】
12 京都新聞20171027【外から見た福知山語る】
13 京都新聞20171101【わがまち○○学 和装催しで交流盛ん】
14 京都新聞20171111【若者、政治身近に】
15 京都新聞20171118【福知山マラソン魅力満載】
16 京都新聞20171125【福知山に初の「子ども食堂」】
17 京都新聞20171201【市議、学生と意見交換】
18 京都新聞20171215【三和ぶどうで農業活性化】
19 京都新聞20180202【公立大学が防災まち歩きマップ】

朝日新聞

1 朝日新聞20170803【福知山公立大生 市議と意見交換】

読売新聞

1 読売新聞20170910【地域に力+学生に学び】
2 読売新聞20171111【学生、福知山市議ら選挙など語り合う】
3 読売新聞20171120【ご飯 みんなで食べようね】
4 読売新聞20171201【古里いいとこ A to Z 探そう】

毎日新聞

1 毎日新聞20170708【幽霊海軍で夏を涼しく】
2 毎日新聞20171206【福知山公立大ＪＲ西と協定】

あやべ市民新聞

1 あやべ市民新聞20170424
【「地域観光」と「農家民宿」テーマに2冊のミニブック】

▼京都新聞20171118
【福知山マラソン魅力満載】

福知山マラソンの魅力を発信する冊子を手にする福知山公立大の学生や、渡邊特任准教授（右）ら＝福知山市内

AからZ キーワード並べ

公立大生ら冊子作製

福知山マラソン 魅力満載

福知山公立大（福知山市）の学生たちが、29日に開催される福知山マラソンの魅力を紹介した冊子「福知山マラソンA to Z」をつくった。自然が楽しめる「田園型マラソン」の「D」など、アルファベットのAからZまで始まる26のキーワードを並べ、全国からランナーが訪れる大会を多角的に紹介している。

「半農半X」の提唱者として知られる渡邊昭彦特任准教授ら、ゼミに所属する3年生6人が執筆した。4～7月に大会関係者らにインタビューしてキーワードを集めた。

「N」はゴール手前でランナーを待ち受ける厳しい上り坂、「K」は老の坂を一緒に走ってくれる応援キッズ、「S」は市名物のスイーツの給食所といったランナーへのおもてなしを表した。

「A」は、明智光秀ゆかりの地でゴールに向かって最後の力をふくす精神、「H」では、かつて参加賞として配られたヒョウタンの民芸品も紹介した。

3年の朝倉慎也さん（26）は、冊子の取材を通じて住民から福知山マラソンへの愛着を感じた。マラソンが地域観光につながる取り組みも考えたいと話した。

1万1千部作製。福知山マラソンの参加者に手渡し、希望者には公立大で配布する。（秋田久氏）

福知山公立大（福知山市）の学生たちが作った「福知山マラソンA to Z」

▼京都新聞20180202
【公立大学が防災まち歩きマップ】

防災の視点を織り込んだまち歩きマップを紹介する福知山公立大の学生ら＝福知山市内で＝千自一晶撮影（福祉会館）

公立大生が防災まち歩きマップ

福知山市社協 助言

福知山公立大（福知山市）の1年生が、地域防災の視点を盛り込んだ市中心部のまち歩きマップを作った。住民を招いた活動報告会を1日、市総合福祉会館（同市内町）で開き、まちの危険箇所を説明した。

見通し悪い道 危険箇所示す

マップは、地域福祉を学ぶ授業の一環で、1年生9人が昨秋、商店や住民が立ち並ぶ市中心部をまわって作成した。市社会福祉協議会の職員から、高齢者や障害者が歩きにくい道路や店舗などを聞き、「見通しが悪い」「段差がある」「夜間は暗い」などの危険箇所や消火栓などをマップに示した。

活動報告会には、市中心部の住民ら約20人が参加。学生が模造紙に手書きしたマップを見せ、老朽化で落ちる恐れがある看板の場所や見通しの悪い道などを示し、注意を呼び掛けた。報告後は住民から過去の水害の様子を聞き、マップの改善点を挙げた。

報告を聞いた福知山観光ガイドの会の塩見豊会長（82）は「ガイドとしても参考になった。これを終わるのではなく、若い視点を生かし、防災や観光に役立つ活動を期待したい」と話した。

マップは11日、公立大で開かれる地域協働型展教報告会で展示する予定。（井上真悠）

▼両丹日日新聞20170804
【福知山市議会で生の学習】

福知山市議会で生の学習

公立大1回生 議員らと意見交換

福知山公立大学（井上真悠代表）の1回生が、福知山市議会議員と意見交換会をした。グループワークなどを通じて、ざっくばらんに意見を出し合い、地方議会の課題について考えを深めた。

公立大の冨樫暉一郎副学長が担当する授業「政治学」の一環。福知山の政治を学び、現状を把握するのが目的で、学生たちは事前学習などをして備えてきに入った。

率直な質問を議員へ投げかける学生たち

乾燥させて保存しているヒョウタンは、まだ多くあり、これからはそれらを使って加工したり、人に教えたりしながら、魅力を伝えていきたいという。

意見交換に参加したのは、学生約40人と議会改革検討会議の議員ら12人。議会改革の説明や議場見学などをしたあと、グループ討議で、学生たちは事前学習などをして備えてきに入った。

テーマは、親しみを持てる議会にするには▽議会運営にかかる経費の将来的な見通し▽地域活性化に求められる市議会議員のあり方▽議員のやりがいとおの動き―の4点。約1時間にわたって議論した。

「親しみを持てる議会」については、話し合ったグループは、市議会傍聴公開と市民参加、議会の機能強化・活性化に関する具体的な取り組みをしているとの説明を受けたあと、率直な意見を議員へ投げかけた。

「議会について、よく分かりやすく伝える方法を模索してほしい」「フェイスブックやツイッターなどのSNSをしている議員はいますか」など、若い世代からは意見が次々と出た。

最終的に「透明性のある開かれた議会をめざして、さまざまな取り組みがなされているが、市民からは『堅苦しい』という考えが払拭できていないのでは」として、市内のイベントへの議員の参加、SNSの利用などの案を挙げ、市民自身も関心を高めるように意識を向ける必要があると述べた。

終了後、学生のグループ代表者が話し合いをした結果をまとめ、全員の前で発表した。今後は、意見交換の内容を踏まえレポートを作成する。

▼両丹日日新聞20170715
【空き家をシェアハウスに】

「空き家をシェアハウスに」

協働会が 公立大生の意見聞く

学生から積極的な意見が出された「市民と公立大学生の意見交換会」の様子

啓光台の住宅地で空き家が増えている問題について、福知山市内の学生と地域住民が意見交換する会が、13日、市総合福祉会館（同市内町）で開かれた。学生からは、空き家を学生向けのシェアハウスに活用する提案などが出され、地域の活性化へ向けた意見交換が行われた。

会は、市協働政策学会（井上真悠代表）が主催し、市内の学生と地域住民ら約40人が参加した。

冒頭、井上代表は「空き家を学生向けのシェアハウスに活用することで、地域の活性化へ向けた意見交換ができればと思う。学生の皆さんは、地域の人たちとコミュニケーションをとるなどして、有意義な学生生活を送ってほしい。地域の人たちも、学生の皆さんから、地域の新しい魅力を見つけてほしい」とあいさつした。

続いて、啓光台地区の空き家の現状などを説明した。

市内の空き家は、市内の空き家の実態調査によると、1人暮らしの高齢者世帯が多く、建物の老朽化が進んでいるとの報告があった。

学生からは、「空き家を学生向けのシェアハウスとして利用するなどの提案ができればいい」などの意見が出された。

「空き家・交流会議」の組織は、調査や、空き家バンクの活用などを提案していくとの説明があった。

「空き家・交流会議」も地域づくりの一環として、空き家バンクの活用などを提案していくとの説明があった。

会の組織は、調査や、空き家バンクの活用などを提案していくとの説明があった。

「空き家・交流会議」は、啓光台地区を含む市内の空き家の実態調査を行っている。

啓光台地区は、市中心部の北西に位置し、1、2、3町の3つの町からなる。1、2町は、昭和40年代、啓光台団地の開発に伴い、住宅が建てられ、3町は、戦前から住宅が建てられ、現在、